



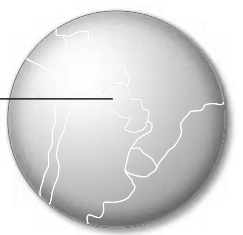
イグアス移住地の農協に展示されていた移住当時の写真。うっそうと茂る原生林が広がっているのが分かる

# FIELD SKETCH

## 苦闘を超えて活躍するパラグアイの日系人

南米大陸のパラグアイに日本人が移住してから今年で70周年を迎えた。ブラジルとアルゼンチンの大国に挟まれた小さな農業国家は、それでも日本よりもやや広い国土を持ち、抜けるような青い空に赤土の大地がはるか地平線まで広がる。辛酸の歴史を刻んできた日系人は、今、この国で大きな存在感をみせている。1週間にわたりパラグアイを駆け回り、苦闘を超えて活躍する多くの日系人を訪ねた。

文・写真 = 安尾 芳典 (共同通信論説委員・編集委員)  
text and photos by Yasuo Yoshisuke



パラグアイ  
Paraguay

「父親が天下国家のことを考えるのが好きな理想家だった」。そう語る前原さんは父親の夢を実現させるために築城を決断したという。「城の中に移民博物館を設けたい」と目を輝かせる

### そびえる城

首都アスンシオンから南東約30キロに前原弘道さん(69)の広大な農場がある。49年前に広島から父親とともに移住した前原さんは、回国で大成功を果たした日系人の一人で、養鶏場は同国屈指の規模を誇る。その前原さんの農場を訪れてまず目を引くのが敷地内にある日本の城だ。堂々とした城で、ここが南米の地なのかと一瞬、目を疑ってしまう。

「なぜパラグアイにお城を」との問いに、前原さんは移民1世として移住し、10年前に亡くなった父親の遺志だったからと説明

した。天守閣まで登ると、地平線まで広がるパラグアイの平原が一望できる。半世紀前に移住した父親と息子の2代にわたる思いは、はるか日本から離れたこの地に造った城から日本に思いをはせたいとの気持ちがあったのではないだろうか。前原さんが経営する「前原農商」は70万羽のニワトリを飼い、1日約50万個の卵を出荷している。同国の卵の約6割を占めるという。アスンシオンのスーパーでも、前原さんの卵が並んでいるのを見かけた。前原さんの事業への夢も城の建設とともに、さらに膨らむ。「これからは牛です。牛は宝の山。価格も安定している。パラグアイ

には牛が1100万頭もあり、500万人の人口の倍以上だ。近代的な牧場で品質管理を徹底して、最高級の牛を育てたい」と意気込んでいた。これまでの養鶏などの成功の秘けつを尋ねると「ブラジルに行つて勉強したから。指導してくれたのがブラジルの日系人だった」と答えた。また「卵は自分で販売して回つた。人に任せると、自分が努力しない」とも言う。だが、それだけとは思えない。やは



り前原さんの事業への人一倍熱意意気込みと若々しい夢を抱いていることが、最大の秘けつだろう。

### 最初の移住地

うっそうと茂るジャングル。そそり立つ大木。そして押し寄せるバッタの大群。70年前に初めてパラグアイに移住した日本人は辛酸をなめた。早々とあきらめて逃げ出す人も出た。アスンシオンから東南130キロにあるラ・コルメナ市は、最初の移住地だ。

千葉玄治郎さん(65)の父、金次郎さんは岩手県の養蚕の不況で、叔父とともに1937年に同市に移住した。両親は移民船「アメリカ丸」の中で知り合い、結婚、4年後に千葉さんが生まれた。母は千葉さんが15歳の時、難産で亡くなった。当時はアスンシオンまでの道路もなく、牛車で近くの町に運ばれ、そこから飛行機でアスンシオンの病院に担ぎ込まれたが、すでに手遅れだったという。

日本人の移住は、約140年前の1868年のハワイ移民が始まりとされ、米国本土、ブラジルなどに広がった。だが米国・ブラジルで日系人の排斥や規制の動きが出た。米国ではアジア人を蔑視する黄禍論まで起きて排日移民法が制定され、日本人の移住が禁止。ブラジルでも1934年、回国で定められた



68年前にラ・コルメナに移住した三井波夫さんのブドウ園。日系人のブドウ栽培で、ラ・コルメナは今、高級ブドウの名産地として知られるようになった。移住当時は、移住許可条件として綿花栽培が義務付けられていたため、日本人は綿花を栽培していたが、洪水や霜の被害などで思うように行かず、一時は大量の脱退者を出したという

移民二分制限法により日本からの移住が大幅に制限された。そして次の移住先がブラジルの隣国のパラグアイだった。当時のブラジル拓殖組合(通称ブラ拓)専務理事の宮坂国入氏の調査を受けて、36年に日本人100家族が試験的に移住した。移住の決め手となったのは、ラ・コルメナ移住地の東(ビジャリカ方面)や北(イビチミ方面)

に山景が見え、祖国日本の面影を感じたからだという。特に移住地の西南にある標高300メートルのセロ・アブラグアという山は、どことなく富士山に似ていて「コルメナ富士」とも呼ばれた。だが41年に始まった第2次世界大戦では、パラグアイが日独伊枢軸国に対して国交断絶を宣言し、宣戦を布告した。このため日本人入植者も途絶え、日本語学校

も閉鎖され、ラ・コルメナ移住地は日本人収容地となり、移住地以外への外出が制限された。ほかの日本人移住地には日本人会の看板が掲げられているが、ラ・コルメナだけは「ラ・コルメナパラグアイ日本文化協会」の看板を掲げている。あえて日本人会の名称を使っていないところに、この移住地の歴史的な苦悩がうかがえる。「65年にアスンシオンにつながる道路ができるまでは、生活は苦しかった。そう振り返る千葉さんは道路(国道1号)ができたことで、農産

## パラグアイを救った 不耕起栽培

パラグアイ東部一帯は「Tierra Roja(赤い大地)」と呼ばれる農業に適した肥沃な土地が広がる。だが大豆・小麦の大規模機械化農業とともに、集中降雨による土壌流出とそれに伴う地力の減退が問題となり始めていた。特に種をまく時期に集中豪雨があり、土壌の大量流出が深刻だった。この問題を解決し、豊かな穀倉地帯に変えた農業技術が不耕起栽培だ。これは、前の作物の収穫後は耕耘・整地せず、次の作物を畑に種まきする栽培方法で、1983年にイグアス移住地の深見明伸さんが大豆で成功し、小麦では窪前勇さんが成功したそう。

不耕起栽培はその後、大豆や小麦を手掛ける日系畑作農家に欠かせない農業技術となったばかりでなく、パラグアイ全土に広がり、米国からも視察に来るなど世界的に注目された。現在パラグアイの大豆耕作地の80%以上は不耕起栽培技術を活用しているという。

不耕起栽培は野菜価格の低迷で苦境に陥っていた日系人農家を救った上、パラグアイの大豆生産を飛躍的に高めるのに大きく貢献した。同国の日系人は約7,000人で、全人口約590万人の0.12%にすぎないが、大豆生産での日本人の占める割合は7%に上る。大豆はパラグアイの輸出品目別で第1位となり、輸出量でも、米国、ブラジル、アルゼンチンなどに次いで世界第4位にランクされた。

不耕起栽培は「農業革命」と言えるほどパラグアイの農業の振興に大きな役割を果たした。

71年にイグアスに高知県物部村から集団で移住したのが、村長だった公文包治さん(84)らだ。「当時日本に限界を感じていた。高齢化と人口減で、人口が5000人を割ったら村



イグアスの日系人の農地。深見さんらの努力で根付いた不耕起栽培は、パラグアイの農業振興に重要な役割を果たした

いけい」と話した。前も今も変わらず貧しい。何とかしなければ

た。の翌年に除草剤を手に入れてから収穫は増えた。なかつたが、幅の広いくわで雑草を取るなどして、それ以前とほぼ同じ収穫があった。その専門家の講演を聴き、ブラジルで不耕起栽培があることを知った。当時はいい除草剤がなかったが、幅の広いくわで雑草を取るなどして、それ以前とほぼ同じ収穫があった。その

深見さんはJICAの招きでブラジルの畑作専門家の講演を聴き、ブラジルで不耕起栽培があることを知った。当時はいい除草剤がなかったが、幅の広いくわで雑草を取るなどして、それ以前とほぼ同じ収穫があった。その

としてやっていけないと国からも言われて、視察で訪れたパラグアイを思い起こし、ここでの分村計画を決定した。移住と呼び掛けたところ、最初は250余世帯が賛成したが、いざ実行という段階で移住地の悲劇が次々と報じられ、移住したのは家族5人と同郷の岡林一栄夫妻だけだった。岡林夫妻の息子は後にプロ野球ヤクルトスワ

ローズの投手として活躍した洋一氏だ。公文さんは「新物部村構想はついでだが、田園都市構想は再生できた。だが移住地の安定と永続化のためには農業一本やりではダメ。またブラジルのように日本人だけでやるうとしてもダメだ。地域と共生し、夢を持っていかないといけない」と話す。パラグアイの日系人の日本語能力は極めて高い。逆にそのために、日本への出稼ぎが多いのが実情だ。

1864～70年のブラジル、アルゼンチン、ウルグアイとの3国戦争では、領土の半分を失い、人口の6分の5が殺されて一挙に約20万にまで激減し、国土はまさに灰じんと化した。また32～35年、ボリビアとの間でチャコ戦争が起き、勝利したものの、国土は大きな打撃を受けた。

FIELD SKETCH



2006年9月8日、「パラグアイ国日本人移住70周年記念式典」がイグアサ市で開催された。1936年に始まったパラグアイ移住は、米国やブラジルへの移住が禁止・制限されたからだが、パラグアイが移住を受け入れたのは、2度にわたる戦争で国土が疲弊し、労働力不足にあったことがあげられる

物を首都まで運べるようになり、収入が増えたと話す。千葉さん一家は入植当時、綿花を栽培していたが、今、千葉さんが手掛けるのは主にブドウ栽培。ブドウ園は4ヘクタールほどで、パラグアイ人5人を雇い、巨峰など高級ブドウを栽培。スーパーに直接卸しているという。

生活で、特に野菜がなかったために、タンポポなどを食べていたそう。入植の最初はやはり綿花を栽培し、その後はポロットという豆類や落花生、そしてワイン用のブドウを育て、道路ができてからはブドウ、スモモ、ミカンなどの果樹を栽培してきた。

「ここに来て、いいとも悪いとも思わない。日本が懐かしいとも思わない」と淡々と話す関さん。これまで2回日本に行き、出身地の群馬県も訪れた。訪問した学校の先生はパラグアイがどこにあるか知らなかった。「海外にいる人は日本を見ているが、日本人は海外を見ていない。日本人は外国に関心が薄いね」と関さんは日本に批判的だ。「この国はのんきでいいよ。日本人だからといって嫌な思いをしたことはない」。

### 不耕起栽培で一躍脚光

パラグアイへの移住は第2次世界大戦で一時途切れたが、戦後54年から再開された。チャバス、ラパス、イグアスなどに次々と日本人が移住していった。

パラグアイでの日系人の存在を高めたのが大豆の不耕起栽培(NOTEを参照)だった。それに成功したのが深見明伸さん(65)だ。57年に高知県から家族と移住し、ラパスから



イグアスの農協前で。左から2目が深見さん、4目が公文さん